

2008年5月15日
第176号

題字 住谷悦治



燎原社
(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823

BOOK 7.10
連載ミレー書房とともに歩んで
戦後伏見・洛南の党と民主運動を語る
一九三四年一月八日京都駅での惨事
連載 忘れ得ぬ人 長谷部文雄さん

総会案内／情報スクランプ／編集後記
南龍男さんに聞く(上)
砂川 良昭
岩井 忠熊
川合 葵子
小田切明徳
12 10 6 6 4 2

【連載】この一枚

京都初のメーデー行進

1924

1924年(大正13年)5月1日



大正13年5月1日、京都駅前広場で

「八時間労働制確立」など掲げて

日本最初のメーデーは1920年5月2日
(日) 東京・上野公園での集会。翌21年、大阪でも初の集会が開かれ京都の印刷工も参加した。

京都では22年、23年とメーデー・デモを行なおうとしたが警察が許可せず「大演説会」として開催、深夜に非合法デモを敢行した(23年)。

24年5月1日午前10時、二千の労働者が京都駅前広場に集まり、「電工組合を先頭にメーデー歌や労働歌を高唱し、各団体ごとに赤い組合旗を押し立て、二十数旒の白い吹流しには決議の事項を墨書きし、市内を練り回つて円山公園におもむき、ここで二十数余名が熱弁をふるい、夜は午後六時から公会堂で開かれる大演説会に繰り込む」(大阪朝日新聞)2日付)意氣盛んぶり。

ちなみに当日の決議は、「八時間労働制確立」「最低賃金法制定」「失業防止の徹底」「市電の割引即時断行」「労農口シアの承認」。

執筆者紹介

南 龍男 (みなみ・たつお)

元ミレー書店店長・宇治市在住。

砂川良昭 (すながわ・よしあき)

元日本共産党洛南地区委員長。伏見区在住。

岩井忠熊 (いわい・ただくま)

本会代表。立命館大学名譽教授。右京区在住。

川合葵子 (かわい・ようこ)

原子物理学研究者。原爆展語り起こしの会。京都市北区在住。

小田切明徳 (おたぎり・あきのり)
本会世話人。山宣性教育研究室長。伏見区在住。

ミレー書房とともに歩んで

上

京都機械をレッドバージされたあと、困難のなかで「ミレー書房」の経営を引き受け、「ミレー外販大宮書店」で2004年3月まで民主書店の灯を守ってきた南龍男さん（76歳）＝病気療養中＝に「歩んで来たひとすじの道」を語っていただきました。（聞き手＝佐々木肇・木村義治）

「フランソワ」で開業、熊野へ移転

ミレー書房の創立者は立野正一さん。四条小橋下がるにいまもある喫茶店「フランソワ」の店主でした。この人が喫茶店の隣に本屋を設立したのが出発点。正確な年月日はわかりませんが戦後いち早くでしょう。もう1947年の2・1スト当時にはあつたと思う。ちなみに立野さんはフランスの画家ジヤン・フランソワ・ミレーにあこがれていてこの名をつけたといいます。

それから何年かして、姫路で高校の先生をしていた永良巳十次さん（1905年生まれ、京大文学部卒、安維持法違反で起訴）が、重税反対闘争により弾圧・起訴（49年）され

大熊野寮の向かいに移した。家主は
履物店をやっていた加藤さん。履物
店の横にあつた小さなスペースを、
「書店として貸してほしい」と頼まれ
承諾したといいます。

しかし、立地条件は四条小橋のほう
が断然有利。京大の近くとはいえ、
丸太町では、とても同じような売上
げは無理。それで永良さんは自転車で
本をいっぱい積んで労組の事務所
などを巡回していた。けれど、とて
も食えるだけの売上げはあがらない
状況でした。

当時は永良さんと清水新一さんの
二人がやっていたけれど、私はレッ
ドページで会社をクビになつて、党
から「書籍を持つて労働組合のなか

京都機械をレッドバージされたあと、困難のなかで「ミレー書房」の経営を受け、「ミレー外販大宮書店」で2004年3月まで民主書店の灯を守ってきた南龍男さん（76歳）＝病気療養中＝に「歩んで来たひとすじの道」を語っていただきました。（聞き手＝佐々木肇・木村義治）

高校を辞めさせられた。立野さんは、戦前から「土曜日」などの文化活動に参加してきた知識人で、永良さんは、顔見知りだったのでしょう。久ビになつた永良さんに、「京都に来てミレー書房をやつてくれないか」と誘い、永良さんが1950年に店長としてやって來た。

に入つて、職場の工作をやれ。書籍の仕入れはミレー書房でせよ」と言われた。それで私は永良さんのところに行つて、本を仕入れ、京都市下京区・南区のいろいろな労働組合に本を持つて回つた。よく売れたのは中央公論社の『中国の赤い星』(スメドレー著)。これは人民解放軍のなかに入つて書いた記録。新中国になって人民解放軍関係のものがよく売れた。

戦後最初のメーテー、
そして2・1スト「決行」

ミレーリ書房の創立者は立野正一さん。四条小橋下がるにいまもある喫茶店「フランソワ」の店主でした。この人が喫茶店の隣に本屋を設立したのが出発点。正確な年月日はわからりませんが戦後いち早くでしょう。もう1947年の2・1スト当時に

はあつたと思う。ちなみに立野さんはフランスの画家ジヤン・フランソワ・ミレーにあこがれていてこの名をつけたといいます。

それから何年かして、姫路で高校の先生をしていた永良巳十次さん

丸太町では、とても同じような売上げは無理。それで永良さんは自転車に本をいっぱい積んで労組の事務所などを巡回していた。けれど、とてももらえるだけの売上げはあがらない状況でした。

だから、私はミレー書房に就職したのではなくて、本を仕入れる側のところが、永良さんが結核で長期療養することになつて、「ついては君やつてくれへんか」となつた。

もともと私は旋盤工。高等小学校2年で敗戦を迎えると、翌3月に卒業して1946年4月1日に京都機械に入社。入社してすぐ、戦後最初の5月1日のメーデーがあつた。会場は御所・建礼門前の広場。「これからは労働者の世の中になる」というので、みんな意気盛んで、私も感動しまし

た。戦後最初のメーデー、そして2・1スト「決行」に、一銭も金が出せないということだから、私はミレー書房に就職したのではなくて、本を仕入れる側。ところが、永良さんが結核で長期療養で、一齊に切り崩されて、第二組合ができた。残つたのは、われわれみたいに、親のすねをかじつて、うな青年部ばかり。まつたくの敗北でした。

養することになつて、「ついては君、やつてくれへんか」となつた。

もともと私は旋盤工。高等小学校2年で敗戦を迎え、翌3月に卒業して1946年4月1日に京都機械に入社。入社してすぐ、戦後最初の5月1日のメーデーがあつた。会場は御所・建礼門前の広場。「これからは労働者の世の中になる」というので、みんな意氣盛んで、私も感動しまし

私はその頃、青共（青年共産主義同盟。民青の前身）で活動していましたが、党にも入りました。まだ16歳くらいです。そうしているうちに50年のレッドページです。その頃、私は肋膜炎（結核による）を患つて、1年ほど京都厚生園に入院していました。そこに組合長が見舞いに来て、「君もレッドページの対象者になつてはいるから退職届にハンコを押せ。」

た

「全国の労働組合は2・1ストがありました。その翌年2・1ストがありました。せよ」というので、あの頃は京都機械も共産党员が多くて、2・1ストに参加することになつたが、係長や工長たちが「そんな政治的な要求でストライキはできない」と言い出して、組合を分裂させようという動きが出てきた。それで2・1ストを待たずに、ストライキに入つてしまつた。ところが2・1ストが中止になつてしまつたので、結果は惨憺たるもの。組合ができて1年足らずで資金もないのに、ストライキに突入したものだから、700人の労働者の生活費が出せない。普通に給料をもらつっていても食えない時代なのに、一銭も金が出せないということでき、一齊に切り崩されて、第二組合ができた。残つたのは、われわれみたいに、親のすねをかじつているような青年部ばかり。まつたくの敗北でした。

今なら『一身上の都合』にしてやるから、どこにでも就職できる。いつたんページの烙印を押されたら、どこも採用してくれないと迫ったけれど、私は「一度考へる」と返事をして、外泊許可をもらい、党の地区委員会に行き、相談しました。地区委員会は、「それはけしからぬ。全組合員・労働者にレッドページを知らせる必要がある」ということで、ビラをつくってくれて、私は地区委員と2人で朝、会社の門前でビラを激怒し、労働組合の執行委員会も「闘わない」という結論を出して、結局、私はクビになりました。

永良さんのあとを引き受け

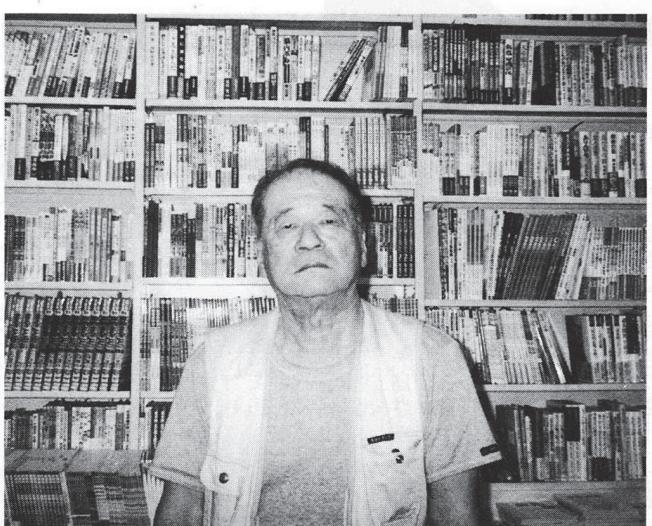
私は昭和6年（1931）6月27

日生まれで、ページされたのは1950年11月なので、20歳と5ヶ月ぐらいいの時のことです。

京都厚生園を退院したのは翌年1月。退院してから書籍活動をやるようになります。書籍活動で半年か1年ぐらい動いた後、永良さんが結核になつた。永良さんの生活も惨憺たるもの。子ども2人の4人家族で、千本中立売辺りの2階を借りていたけれど、2000～3000円の給料すら出ない状態。そんな永良さんから「入院するから、後をやつてくれ」などと言われて、店番する人間もないし、仕方がない。もう一人、清

水さんがいたけれど、彼もその時に辞めました。

外販で引つづいていたのは、私と徳井君です。二人は、ミレー書房から給料をもらっているのではなく、本を売った錢で生活していました。失業保険が6ヶ月ほど出て、それなんとか生活できていたけれど、失業保険がそろそろ切れそうな時に、永良さんの後を引き受けってくれといふ話が出た。それで、私と徳井君は話し合って、「二人で力を合わせて、交代で店番したり配達したりしよう。民主書店をつぶすわけにはいかない」と言ひ、店番したりしよ



1973年に開店したミレー外販大宮書店（四条大宮上ル）で

書店は3軒。熊野神社にミレー書房、京大農学部前にイスクラ書房、蛸薬師に志ののめ書房。蛸薬師の店主は、岡田清さんという人で、豆腐屋をやっていた。その豆腐屋の軒を借りて本屋をやつたのが、島津製作所をレッドペイジされた天野勝治さん。

軒先だから1～1・5坪の狭さで、まるで道端でやつているような店。壁に本を並べた。3店とも民主書店で、いちばん長い伝統があるのはミレー書房ですが、いちばん売上げが確保され発展性があったのは志ののめ書房。立地がよくて、店売りができる。日曜日にになると、丹後その他遠いところからお客様が来て、朝9時の開店を待つてた。

志ののめ書房以外の店は、外販しないと維持できない状態だった。人員は、ミレー書房三人、イスクラ書房も三人ほど、志ののめ書房は三、四人いた。そういうするうちに、永良さんが病気で辞めていき、回復す

ないと京大生協に入りました（のちに京都府生協連会長理事）。

4 店舗体制で新「ミレー書房」に

残された三人で必死にやつてゐるが、伏見店は、採算などの見通しは何もなし。天野さんも給料はまともにもらつてはいないという状況で、設立して半年か1年ぐらいで、「問屋に金も払えない。この際、閉店した」となり伏見店は閉店しました。当

時のお金で約30万円の借金・負債があつたと思います。結局、伏見店があつたのは1年ほどです。

（以下次号）

戦後伏見・洛南の党と民主運動を語る

砂川 良昭

2008年2月29日、伏見区深草の藤森神社に近い喫茶店「そぞう館」で、「京都の民主運動史を語る会」(岩井忠熊代表)の例会が開かれました。当日は日本共産党洛南地区委員会の元地区委員長の砂川良昭氏が、伏見区の中書島におかれた地区委員会時代をふくめ貴重な体験を講演しました。洛南地区委員会再建以後を中心とした講演の大要は以下のとおり。(文責・さとう)

(1) 戦後の山城地域の状況について

戦後、1946年4月に日本共産党中央委員会が再建され、6月には伏見区に党组织が確立しました。当時の委員長は西口克己さん(故人・後に作家・府市議)でした。伏見以南でも、47年の暮れから48年のはじめころには井手町、田辺町、相楽郡には南山城地区委員会が結成されました。宇治市は

独立して市委員会がつくられ、初代委員長は、山中平治さんでした。1947年4月、新憲法のもとではじめて一

斉地方選挙がおこなわれました。

京都市議選挙では左京区で安井病院の安井信雄院長、山城町(旧村の単位)では上柏村と棚倉村で棚倉村議選挙光三氏が当選されました。

に矢島藤太郎さんと京都市北部の市場村で長壁民之助さんの三名が当選しました。(注①)宇治横島村村議に岡田河田賢治さん(注③故人、後に京都府委員長・元参院議員)や農民組合の泉隆さんが出入りしていました。また、いつもワラジ履きの河田さんは泉さんや京大の学生の石田千歳さん(注④後は香川県委員長)と一緒に相楽や綾喜の党や農民組合のオルグ活動をしていました。

私は、当時、大河原村に住んでいて奈良電(注⑤後の近鉄)の田辺駅保線区で働いていましたが、通勤の途上で京大的学生帽をかぶった石田さんに声をかけられたのです。「あんた、河上肇の『貧乏物語』知ってるか」と穏やかな口調で話をしてくれました。

「搾取とは」とか、「戦争とは」などなど、私は初めて聞くことばかりで目をぱちくりさせて聞いたもんです。そして、河田さんにも紹介され、「獄中16年、戦争反対を不屈に闘つた偉い人」と聞かされ、驚きました。「こんな

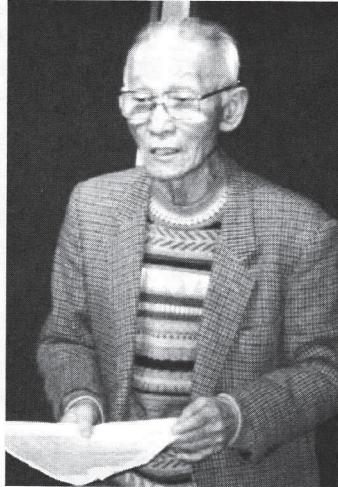
関に掲げた「日本共産党棚倉細胞」と墨字でかかれた人の背丈もある大きな看板です。

もう一つ忘れられないのは、隣の上柏村にいた和田孝英医師です。後に太秦病院の院長です。和田先生のお宅に

河田賢治さん(注③故人、後に京都府委員長・元参院議員)や農民組合の賀村(後に井手町)だけでも約100人もいました。こうした力によって、1949年1月の総選挙で党は衆議院35人、京都1区で谷口善太郎、2区では河田賢治さんが当選しました。

(2) 反動の嵐の中で

国際的には、1949年10月に中国革命が勝利し中華人民共和国が成立しましたし、朝鮮戦争の勃発もありました。国内的には、日本共産党の躍進を押さえ込む様々な謀略が画策されました。下山、三鷹、松川などの鉄道がらみの謀略事件を使つた「レッドパージ」の嵐が吹き荒れました。党组织も分裂などの困難な時期をむかえましたが、そうした中でも朝鮮戦争への武力介入反対闘争や重税反対闘争などが大衆的に取り組まれました。



講演する砂川良昭氏

すのは矢島さんの自宅の玄

なかのおっさんが」と不思議に思いました。しばらくして、石田さんから入党を進められ、私は迷わず入党を決意しました。1948年の12月でした。

当時あの山深い大河原村でも、十数人の党员と約100人の農民組合員が組織していました。当時の党组织は電産(注⑤現在の関西電力)と国鉄の労働者が中心でした。47年頃には、京都全体で農業は2万人が加入し、農地改革・米の強制供出反対・米飯よこせ・重税反対などの闘いの先頭に立っていました。共青(注⑥共産青年同盟、後に民青)は、山城地域では多く組織されていました。当時の農民組合員は、電産(注⑤現在の関西電力)と国鉄の労働者が中心でした。47年頃には、京都全体で農業は2万人が加入し、農地改革・米の強制供出反対・米飯よこせ・重税反対などの闘いの先頭に立っていました。共青(注⑥共産青年同盟、後に民青)は、山城地域では多く組織されていました。当時の農民組合員は、

(3) 洛南地区委員会の結成前後について

1958年の第7回党大会でいわゆる「50年問題」を総括し、党の「統一と団結」をとりもどしました。この党大会を受けて、1959年2月に洛南地区委員会が結成されました。同年4月の京都市議選挙で作家として著名になつた西口克己氏を伏見区で党として初めて当選させました。洛南地区の再建準備委員として市川清一さんや西山秀尚さん（元府議団長）、松尾孝さん（現府議、藤川竹夫さん（元城陽市議）等が活躍されました。

当時は、地区委員会事務所は中書島の西口克己氏の元遊郭の6畳一間を借りていました。そして、1960年春に私が府委員会のオルグとして伏見地区委員会に委員長として派遣されました。当時の党の力量は、60人程度でした。私が府委員会のオルグとして伏見地区委員会に集中していました。経営では奈良電に10人ぐらい、居住組織でも伏見南部に南浜・桃山・住吉の広い地域に数人。北部でも深草・稻荷に3人程度という状況でした。

毎日の活動は、100部程度の日刊紙赤旗の配達で始まりました。伏見地域は私（元府議）が配達しました。福山さんは50年代の中頃から一貫して赤旗配達をしながら党活動に専従し、久津川の改造したニワトリ小屋に住んでいた時期もあったとのことです。私は自転

(4) 60年安保闘争と第8回党大会の綱領決定、党建設

車での配達でしたので、毎朝、桃山から稻荷まで半日かかっていました。途中、同志の家によつていろいろ話をしながら配達していましたから、時には夕方まで事務所に帰れないこともあります。後に50ccのバイクで配るようになつたときは本当にうれしかったものでした。（以下略）



党中央から党勢倍加運動で数十万の党建設が提起されたとき、ピンとこなつたのですが、全国活動者会議に参加した川口祐一さん（元宇治市議）が「目からウロコがおちた」頑張らねば…と大いに語り合つたものです。大運動の結果、洛南全体で118部の機関紙から、一年後には1000部に、150人の党员に前進しました。そうした中で党の前進基地が遊郭の一角でいいのかと問題となり、千名の党员で事務所を建設しようと革命的ロマンを語りあつたのです。

そして、党建設と大衆運動は車の両輪で前進しました。経営関係では新日本理化の木下恵市さん、辺見政雄さん、橋本化学の武智唯一さんらが中心となつて、橋本製作所、森田製作所、倉橋ゴム、寺内製作所、黒川染工、宇治のユニチカなどで党の建設が進みました。大衆運動では、62年には17人の会員で民主商工会が立ち上がり、井ノ口誠二さん（のち京都市議）が専従になりました。決意をしました。給料の出る見通しのない中で重い決意だったと思いま

す。つづいて新婦人、京建労、民青同盟、全解連などの大衆組織が建設されました。それを打ち破るために、自治体の空白克服を着実に進め、「日本の夜明けは京都から」のスローガンで洛南地区の党建設を進めてきました。

映画「靖国」、京都シネマで6月7日からロードショー

右翼の妨害で上映を「自粛」する映画館が相次ぐなか、京都シネマ（四条烏丸下る西側 COCON烏丸3階）は6月7日（土）から予定通り上映する。問い合わせは、電話075-353-4723。

一九三四年一月八日京都駅での惨事

岩井忠熊

その翌朝の新聞各社はみな一面トップの記事で大きく事件の概要を伝えた。ほとんどの新聞は号外を出し、数日間はこの問題でもちきりの有様だった。もちろん、ラジオのニュースは事件を速報したであろうが、当時のラジオの普及はまだ広くなかったので、新聞で初めて知った人が多かつたと思われる。

域の壮丁の海軍入団先は舞鶴海兵団だった。だが一九二三年、折からの軍縮で舞鶴鎮守府は要港部に格下げされ、舞鶴海兵団が廃止されたために呉海兵团への入団となっていたのである。舞鶴鎮守府と海兵団は日中全面戦争の中の一九三九年に復活している。

熱狂的な見送りの背景

事件というのは次の通りである。そ
の日午後一〇時二三分発の臨時列車で
呉海兵団に入団する壮丁を見送るために
数千人の民衆が押し寄せた。入団者は
喜という右翼言論人が東大法学部の末
弘巣太郎教授を不敬罪等で告発し、陸
軍省が「国防の本義と其の強化の提唱」
というパンフを刊行した年である。またロンドン海軍軍縮条約の満期を前にして、無条約時代の国防をめぐる論議
が言論界でとびかつた時期でもあった。
しかしこの年に海外で目立った武力衝突の事件があつたわけではない。海軍

になだれ込み、目撃者によれば一人が

ころんだのがキッカケでその上にあとからきた人たちがかぶさって、「人波の大なだれ」となり、死者七六人、重傷者六三人に達したといふのである。入団者にも若干の負傷者が出ていた。

元来、京都府を中心とする以上の地

即発の危機をはらんでいた。入団する壮丁たちの前途はけつして安穏とは思えない。海軍の現役期間は陸軍より一年長い三年である。そのような情勢が大勢の熱狂的な見送りを生じた背景にあつた。

歓送者たちが入団者をどのように送ろうとしたのかについては、新聞記事

では分からぬ。多分「祝入団××君」とか「祈武運長久」とかの旗やのぼりが用意されていただろ。前者はいわば当時のきまつた公式の表現であり、特に人びとの感情を強く現したとはいえないだろう。だが後者は複雑である。手柄をたててこいとも、ただ無事に還つてこいとも、二様の意味でいわれたからである。熱烈な歓送ぶりのかけでは、そうした感情が複雑に織りまさつていただろうと思われる。

最近の歴史学あるいは民俗学の研究

が明らかにしたところによれば、近代の日本では「徴兵のがれ」のための村をあげての民俗的信仰行事の存在が確認されつつある（たとえば喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館、一九九九）。それでもくじ運わるく徴兵されてしまった者はひとつ「災厄」と見なされたが、いざ入隊する時には村人から「武運長久を祈る」とのことばで見送られたのである。しかしこのようないい研究によつても、戦争に参加して生き残った人たちも村人たちにも、大陸での日本軍による加害者の意識はうすかつたとされている。

戦争末期に徵集されて海軍に入つた筆者の経験では、心から軍国主義にそまつて、天皇のために命をささげようという人たちもたくさん見た。しかし出撃間ぎわにひそかに連絡をとつて、



▲当時の京都駅（1914年8月15日大正天皇御大典のため改築。1950年11月18日焼失）

家族たちと別れをおしんだ人もたくさん見た。そのための連絡を軍内からの郵便ですることは、上官の検閲があつたから不可能だつた。出撃は極秘だから、軍外の人の協力を得たか、郵便に暗号を使つたのだろう。軍港などにはそうした家族との出会いのための宿屋や下宿屋がたくさんあり、当局者にもそうした事情は当然分かつてゐたはずだが、特に摘發されることもなかつた。出撃は厳密だが、その辺はあうんの呼吸での黙認だつた。

一九三四年京都駅での惨事は、軍国主義下日本社会の問題として、さらに検討を要するし、忘れ去られてはならないだろう。そこには矛盾し屈折した感情があることは事実だ。しかも結局は軍国主義にからみ取られていつた国民の姿が見られるように思つ。

「大和ミュージアム」と江田島に見る “草の根軍国主義”

筆者は二〇〇五年五月、全教海田支部の人たちに依頼されて「特攻『大和』の悲劇はなぜおこったのか」と題する講演をしてきた。同年二月に、呉で「大和ミュージアム」が開館され、五月現在で来館者が二五万人に達するといふ。この風潮を批判してほしいといふのである。縮尺十分の一の「大和」や人間魚雷「回天」の実物と、展示の詳細な解説がI-T機器を駆使してなされた。呉の海軍工廠で完成された

「大和」が、きわめて高度の科学技術にもとづいており、その技術が戦後日本経済の発展にいかに貢献しているかが具体的また詳細に述べられている。格別の知識をもたない人は、その説明にただ圧倒されてしまうだろう。ただ「大和」建造のために国民生活のぎせいでどれだけの巨費が用いられたか、「大和」でどれだけ多くの戦死者（三千をこえる）を出し、また一回の「戦果」もあげえず、部内では「無用の長物、世界三大馬鹿の一」と自嘲された等についてまつたくふれずに、ただその勇戦奮闘だけが語られていた。土曜日の午後だったせいか、館内は参観者で雑踏し、駐車場には大型の観光バスが何台もいた。その人たちに、外見上軍国主義に対する疑問や批判の感情をよみとることができなかつた。

翌日、フェリー・ボートに乗つて江田島にわたり、海上自衛隊幹部学校をたずね、旧海軍兵学校から継承されてきた教育参考館を見学した。中年の曹（旧下士官に相当）らしい案内者に連れられて構内と参考館を歩いたが、ここはまったくの軍国主義的空間である。構内を歩く隊員の歩き方までがかつて筆者が海軍で訓練された通りだつた。施設・器具の名称まで昔の通りだつたのには苦笑さえうかんだ。案内者が参観者の中学生にしきりに話しかけようとするところに、いまの自衛隊の関心がどこにあるかをしめしているようだ

ちなんに見学の時間が平日に三回、土・日・祝日は四回設定されており、筆者の参加したときは各数十人の四グループが見学していた。構内は整然・清潔であり、一般の大学のキャンパスよりも美しい。隊員はみなキビキビしており、最近に街で見かける自堕落な外見の青年は見かけなかつた。見学者たちに一種の感動と讃嘆の気分がただよつたように見えたのが、筆者の錯覚であれば幸いだが。江田島にも広島ナンバーでない観光バス数台と多くのマニアカーが駐車していた。

「大和ミュージアム」といふ江田島といふ、私はそこに集まる人たちに、一種の「草の根の軍国主義」を感じずイカーラーが駐車していた。

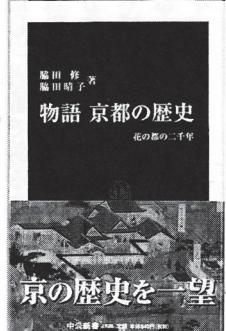
民主運動は権力と金力に対してもつてたたかってきた不屈の歴史をもつてゐる。だが「草の根の軍国主義」にとらわれてゐる民衆に対して、しづかに粘り強く説得をつづける努力に弱点をもちつづけていたのではなかろうか。憲法九条改悪の氣運を前にして、あらためて痛みする。

にふりがなを付けたりして、読みやすく、理解しやすい工夫がされている。1月発売と同時にベストセラーに入り、版を重ねていている。千年もの長きにわたり日本の中心であつた京の都、今も多く人が訪れる寺社・名所の縁起をひもときつつ、花の都と詠われた京の歴史を一望する本。「近代以降」は20頁、うち戦後二千年を叙述するにはやむを得ないことか。（中公新書・定価940円）

BOOK

脇田晴子 著 「物語 京都の歴史

——花の都の二千年



新書版 308頁、コンパクトに
京都の原始・古代から近代以降まで
が物語としてまとめられて

にふりがなを付けたりして、読みやすく、理解しやすい工夫がされている。1月発売と同時にベストセラーに入り、版を重ねていている。

千年もの長きにわたり日本の中心であつた京の都、今も多く人が訪れる寺社・名所の縁起をひもときつつ、花の都と詠われた京の歴史を一望する本。「近代以降」は20頁、うち戦後二千年を叙述するにはやむを得ないことか。（中公新書・定価940円）

ちなみに見学の時間が平日に三回、土・日・祝日は四回設定されており、筆者の参加したときは各数十人の四グループが見学していた。構内は整然・清潔であり、一般の大学のキャンパスよりも美しい。隊員はみなキビキビしており、最近に街で見かける自堕落な外見の青年は見かけなかつた。見学者たちに一種の感動と讃嘆の気分がただよつたように見えたのが、筆者の錯覚であれば幸いだが。江田島にも広島ナンバーでない観光バス数台と多くのマニアカーが駐車していた。

「大和ミュージアム」といふ江田島といふ、私はそこに集まる人たちに、一種の「草の根の軍国主義」を感じずイカーラーが駐車していた。

民主運動は権力と金力に対してもつてたたかってきた不屈の歴史をもつてゐる。だが「草の根の軍国主義」にとらわれてゐる民衆に対して、しづかに粘り強く説得をつづける努力に弱点をもちつづけていたのではなかろうか。憲法九条改悪の氣運を前にして、あらためて痛みする。

にふりがなを付けたりして、読みやすく、理解しやすい工夫がされている。1月発売と同時にベストセラーに入り、版を重ねていている。千年もの長きにわたり日本の中心であつた京の都、今も多く人が訪れる寺社・名所の縁起をひもときつつ、花の都と詠われた京の歴史を一望する本。「近代以降」は20頁、うち戦後二千年を叙述するにはやむを得ないことか。（中公新書・定価940円）

忘れ得ぬ人

長谷部文雄さん

川合葉子（原爆展掘り起こしの会）

「燎原」第一七二号に岩井忠熊先生が「当時の複数の活動家だった先輩から戦後に聞いたところでは、在野の長谷部文雄宅での資本論研究会、梯明秀宅での哲学研究会がひそかにもたれ……」と書いてくださっています。この研究会のことを、長谷部文雄さんが『資本論隨筆』（青木新書、1956年）の中に割合詳しく書き残しておられるので、その一部を紹介しておきたい。なお、梯明秀は私の父である。

「昭和九年、私が出獄してから間もないころ、彼（梯）がやつてきて、『資本論』の研究会をやろうといい出した。当時、彼の家ではすでにヘーゲル研究会をやっており、そのメンバーの一部が別に『資本論』研究会を計画して、それを私の家でやろうということになつたのである。この話は、私の『資本論』第一巻訳稿がほぼ完成した昭和十年の末ごろに実現して、十三年の春まで、毎週一回、私の家で研究会がもたれることになつたのである。

右にあげた諸君のうちには、特殊な理由で一度も出席しないものが二、三あつたが、それもはつきりと学生ばかりであった。もつとも、学士組で最後まで残つたのは栗本ひとりであり、終りころはほとんど学生ばかりであった。もつとも、

た。あしきけ四年にもわたり、メンバーには変動があつたが、だいたい古頬順に挙げれば、梯と私のほかには、加古祐二郎、加藤正（この二人は岩波文庫『自然弁証法』の訳者、いずれも病死）、淵定（立命大教授、戦死）、吉富重夫（現、大阪市大教授）、栗本勤（現、信州大学教授）、などが学士組。学生組（ほとんどが京大の経済、歴史、哲學の学生）は、石原一（病死）、長島孝雄（獄死）、布施杜生（獄死）、村上尚治（戦死）、野田千之（戦死）、服部（名前を忘れた）、東亞同文書院教授（病死）、椋梨実、小野義彦、有田正三、姉歯二郎、西田勲、野口俊雄、鈴木光次、奈良本辰也、藤谷俊雄、浅野勉、上杉正一郎、飯沼修（俳優座の永井智雄）、など。

この『資本論』研究会はついに昭和十三年の初めに解散した。悪条件累積の結果である。まず一月か二月に、メンバーの長島、村上、布施、椋梨などが共産主義者団関係で検挙され、検挙されなかつた学生は三月にぜんぶ卒業して、梯、栗本、私のほかは誰もいなくなつた。その梯も六月ごろ、私も八月ごろに検挙された。『資本論』そのものは、すでにそれ以前に禁止処分を受けていたのである。（初出、経済評論一九五六年、なお文中の長島）は、「永島」が正しい。

翌年八月ごろ、長谷部さんは逮捕され、同志社大学を追われることになった。一九三四（昭和九）年に出獄された後は、『資本論』の翻訳に殆どの時間を当てておられたようだ。當時桃山に住んでいた我が家に散步の途中というような感じで、

燎原 第176号 (2008年5月15日) 8

記憶しないほど、この連中は事実上一つのグループだったのである。

この研究会の運営は、梯明秀を座長として、私は、テキストである高畠訳改造社版の誤訳悪訳を指摘訂正し、当番であるメンバーの研究報告を中心に討論するというやり方であった。情勢が悪化するにつれてだんだん用心ぶかくなり、出入はかならず一人ですることにしたが、それでも危険なので、最後のころには京大楽友会館の小集会室を借りることもあつた。まつたく夢のような話である。

この連中は事実上一つのグループだったのである。長い間、梯明秀は船山信一さんとともに「哲学・科学の会」を立ち上げ、同志社の住谷悦治さんには出席しておられた。ここで長谷部さんは、梯明秀がティメイメリッシュでなくカケハシという日本人だと認識されたようである。

翌年八月ごろ、長谷部さんは逮捕され、同志社大学を追われることになった。一九三四（昭和九）年に出獄された後は、『資本論』の翻訳に殆どの時間を当てておられたようだ。當時桃山に住んでいた我が家に散步の途中というような感じで、長谷部さんは立ち寄られた。しばらく父と話しこんだ後、「じゃー葉子ちゃん、一緒に行こうか」と長谷部さんに声をかけられて、長谷部さんのお宅までいったことを覚えている。

長谷部さんのお宅でどうしていたのか、殆ど記憶がない。お宅は同志社大学の近く、今出川新町にあつて、長谷部さんが設計された新築の家だけという。朝食は板の間にテーブ

ルといすがあつて、私は子供用のいすでトーストを頂いた。続きの板の間にお台所があつた。こういう部屋のつくりは、今では珍しくもないが、第二次世界大戦の前の京都では、土間に降りなくともいいお台所はとても新鮮に見えた。長谷部さんは自分でコーヒーミルをひいて、みんなに振舞つておられた。部屋中がコーヒーの香りで一杯だつた。

翌日、両親が迎えに来てくれた。父が長谷部さんと奥で話し込んでいた間、母は食堂で百合子夫人と話をしていた。やがて、眠り込んだ妹を父はそっと抱いて、長谷部さん夫婦に丁寧にあいさつをして、私たちは帰途に着いた。妹は一歳になるかならないかだったので、自分は四歳のころだろうかと思っている。

『資本論』研究会と翻訳の仕事

私達一家が一乗寺塚本町に越したころから、我が家には学生さんたちの出入りが多くなり、二階の父の部屋では研究会がよく行われていた。そして長谷部家でも『資本論』研究会が始まったのである。この研究会に刺激を受けながら、長谷部さんは翻訳を進めておられたようと思う。宮川実さん編集の『回想の長谷部文雄』には、数人がこの研究会のことについて触れておられる。長谷部さんの文中に出てくる学生の何人かは翻訳の

お手伝いをしておられた。それは同時にこの方たちへのマルクス主義経済学の手ほどきとなつたのであろう。長谷部さんの検挙の直後に、浅野さんと上杉さんは長谷部家を訪れて、訳し終わっていた原稿を預かり、完全なところに移したそうである。こうして敗戦後の早い時期に日本評論社から『資本論』が次々と出版することができた。

梯はこのときの検挙で、執行猶予付きの判決を受けて、友人の紹介で北支那開発株式会社の調査部に就職し、家族ともども東京に移つた。そ

「世界文化史概観」を共訳しておられた。細い小道をはさんで、阿部知二さんのお宅と隣り合っていた。広い敷地に草や木が生えていて、その奥に平屋建ての家があった。このお宅にもいろいろな思い出がある。

妹であり、この時期、ウエルズの

京に赴任し、その翌年には家族で北京に渡ることになった。出発の直前

「ゆつくり仕事をするのも大事」

一九四一（昭和一六）年に父が北

「ゆっくり仕事をするのも大事」

本当は自分に言い聞かせるためにつしゃつたのかもしれない。けれども私に語りかけられたことは事実だつた。言葉は私の胸にずしんと響いて、心の中で何度もつぶやきながら繰り返して、覚え続けていた。そして今でも覚えている言葉である。

いつの時点からならないが、長谷部さんは私達の一家が北京に移り住むことに反対されたようである。アメリカとの交戦が始まるとから日本との経済力の差は歴然としていたから、戦争が終わるのは遠い先のことでは



1955年頃の長谷部文雄さん（『資本論隨筆』より）

1897年、愛媛県に生まれる。1923年京都大学経済学部卒業、24年から33年まで同志社大、1967年から龍谷大の教員。訳書に、マルクス『資本論』『賃労働と資本』、ルクセンブルグ『資本蓄積論』など多数。1979年没。

い。けれどおじさんはね、ゆつくり
することが大事だと思うんだよ。」
というようなことをおっしゃった。

の数日を長谷部家で過ごさせていた
だいた。日本では食料を手に入れる
のが次第に不自由になつていた。と
ころが長谷部さんは何処からかコー
ヒー豆を手に入れてきて、座敷の真
ん中でコーヒーミルをゆづくりとひ
いておられた。私はそれを見つと見
つめていた。そのとき急に長谷部さ
んはまじめな顔になつて、

ないと、長谷部さんや父の周りでは考えられていた。それが分かってい

るのに、危険なところにいく必要はない」と長谷部さんは考えられたのだと思う。しかし、当時の支配体制が崩壊するまで、私達は家族ぐるみで生き延びなければならなかつた。それがいつまでのことは予測できな

かつた。それで両親は渡航を決意し、長谷部さんはその旅立ちを助けてくださつたのだと思つてゐる。生き抜かなければならぬのは、日本に残る人たちにとつても同じことであつた。そういう緊迫した雰囲気の中で、私達は日本を離れた。

敗戦後、私達は、父とその他の家族とが別々に帰国し、やがて岡山と一緒に住むようになつた。そして一九五〇年には一家で京都に戻つてきただ。長谷部さん一家は一九四四（昭和十九）年に故郷の今治に帰られて、戦後も今治で翻訳を続けながら、いくつかの大学で集中講義などををしておられた。一九六二（昭和三七）年に東京に移られたが、一九六七年から通勤された。京都においてはるたびに、お電話を頂いたり、家までお越し頂いたり、お付き合いは私が家を出てからも続いていた。

師弟愛と友情に結ばれた人の輪

長谷部さんが亡くなつた後、宮川

実さんを中心に『回想の長谷部文雄』の出版の企画があったのは一九八〇年の秋ごろであった。当時父は家の中の階段を踏み外して転げ落ち、大怪我をして寝込んでいた。母が父のこのような事情を書き、お断りとお詫びを述べた文章がそのまま回想記に掲載されている。

この回想記を改めて読んでみると、『資本論』の翻訳を一生の仕事にされた長谷部さんの周りに、いくつもの人の輪があつて、お互いに励ましあいながら、十五年戦争の困難な時期を、志を捨てることなく生き抜いてこられたのだということを強く感じる。この人の輪の先頭には、河上肇先生とその門下の三人男といわれた長谷部文雄、宮川実、堀江邑一の師弟愛と友情に結ばれた人の輪があつた。三人の方はほぼ同じころに河上先生の下に集まっていた。そのころから、河上先生は弁証法的唯物論を理解し、マルクスの『資本論』の研究を始められた。丁度その時期に、この三人が先生に師事しておられたおかげで、あの困難な時期に『資本論』の翻訳から出版までの道を切り開くことができたのである。その中でも長谷部さんは環境に恵まれており、さらに、堀江さんが書かれているように、「先生が苦心惨憺獲得された成果を、自分の研究と翻訳に生かすことができた」という幸運に恵まれていたので、『剩余価値学説史』

「魂のこもった翻訳」と評価

を含めた『資本論』の四巻の完訳を成し遂げられたのである。

丁度私達一家が北京に旅立つ前、長谷部家にお世話になつたころは、『資本論』の翻訳の仕事は今治など完全な場所に疎開させておられたよう

その長谷部さんに十歳のころに仕事の仕方について教えを受けた私は、長谷部さんを取り巻くさまざまな人の輪の一一番外側に繋がっているのかもしれないと思う。体が弱く、人並みのスピードで仕事をこなすことが出来ない私は、長谷部さんの言葉に助けられてきたとつくづく思う。

檸檬（れもん）通信

筋
立明著

弁護士の著者は、事務所（寺町

二条) が梶井基次郎の小説「檸檬

の八百屋に近いところから一櫻櫻通言一二呂計ナニ、ガロ、ガ氏ニ

「通信」と名付けたダブロイト紙を年々出している。本書はこの

通信に載つたエツセイを中心

心にまとめられた私家版。

司法改革や弁護士・弁護

士会、医療裁判などを論じ

た「固い」文章も多いが

「随想」「その時々」の章では、

治安維持法で山科刑務所獄房に収監された能勢克男が

護士のこと、浅井清信、天野和夫

水上勉さんらの思い出や、地上ば

とたかう「れんこんや」の話を

どが綴られ興味深い。

(A5判330頁・京都中央法律事務所)

事務所

BOOK

司法改革や弁護士・弁護士会、医療裁判などを論じた「堅い」文章も多いが

治安維持法で山科刑務所で
房に収監された能勢克男を紹
護士のこと、浅井清信、天野和夫
水上勉さんらの思い出や、地上ば
とたかう「れんこんや」の話など
が綴られ興味深い。

(A5判 330頁・京都中央法律
事務所)

チャングムの出産シーン撮影は「回天」の基地だった

濟州島4・3事件の跡を訪ねる

小田切明徳

2月17日の「赤旗」日曜版に「濟州島で衝撃」と題する高知県の岡崎かをりさんの投書が載っていた。ああ、私たちだけではないんだな、の思いをもつた。今年の1月中旬濟州島へ旅した。閑空からは2時間余り、まず、火山島の半日観光に出かけ、二日目が目的の「4・3事件」の跡地をめぐるオプションであつたが、この詳細は述べない。「石と風と女性が多い」のがこの火山島と、ガイドさんが言う通り、寒風が強く、冬の蜜柑(名産)などの農作業はつらいと。ならば、ホカロン(携帯用懐炉)を送ろうと帰国して宅配便を準備したが、「これは送れない」と言われた。無念(いい方法ありませんか)。

旧日本軍の格納庫がいくつも

島の南西のモスルボに行つた。ここに旧日本軍の飛行機「神風」の格納庫があつた。そこはジャガイモが植えられた畑であつたが、こうした格納庫がいくつもあつたのには驚いた。続いて見学したのは、松岳山海岸の「チャングムの誓い」のロケが

行われた所。あの映画の終わり近くに、鍼を使った無痛分娩・出産シーンが行われた洞窟を見た。こうした洞が十数あつたが、これが回天の出撃基地だった。チャングムの映画監督はこのことを知つて撮つたのだろう。この海岸線近くの「ヨカレン基地」は朝鮮・中国への出撃の陣地であり、そして「4・3事件」の虐殺の場であつた。多重の苦難の歴史が刻まれたところで村は廃墟化して誰も住んでいなかつた。'07年末に慰靈の塔が建てられ、三百人以上の犠牲者の名前のあるプレートに我々参加者は額ずいた。「4・3事件」の跡地の見学が目的であつたが、朝鮮・中國を射程にした神風・回天基地・Keystone・E-2Cでの日本の加害責任を意識せざるを得なかつた。

富士ツーリスト(今回のツアー)はこの「友の会」主催であつた)の準備してくれた資料に「朝鮮日報」の切り抜きコピーがあつた。ノ・ムヒヨン前大統領の「事件発生から55年目に正式な謝罪、犠牲者への追悼」がそこにあつた。この韓国政府の負

行われた所。あの映画の終わり近くに、鍼を使った無痛分娩・出産シーンが行われた洞窟を見た。こうした洞が十数あつたが、これが回天の出撃基地だった。チャングムの映画監督はこのことを知つて撮つたのだろう。この海岸線近くの「ヨカレン基地」は朝鮮・中国への出撃の陣地であり、そして「4・3事件」の虐殺の場であつた。多重の苦難の歴史が刻まれたところで村は廃墟化して誰も住んでいなかつた。'07年末に慰靈の塔が建てられ、三百人以上の犠牲者の名前のあるプレートに我々参加者は額ずいた。「4・3事件」の跡地の見学が目的であつたが、朝鮮・中國を射程にした神風・回天基地・Keystone・E-2Cでの日本の加害責任を意識せざるを得なかつた。

富士ツーリスト(今回のツアー)はこの「友の会」主催であつた)の準備してくれた資料に「朝鮮日報」の切り抜きコピーがあつた。ノ・ムヒヨン前大統領の「事件発生から55年目に正式な謝罪、犠牲者への追悼」がそこにあつた。この韓国政府の負

の後進性を恥に思う。この近くには平和博物館があつた。館長の李英根さんはその日に拾い集めた日本帝国軍の砲弾2個を我々に示して「戦争には、勝者も敗者もない。皆被害者だ」と語つた。

まさに「衝撃の場所」

この島は、まさに「衝撃の場所」である。4・3事件は、引き続き起る朝鮮戦争を含め「冷戦体制」に組み込まれて濟州島は砲火の連続

にあつた。それゆえ廢墟と化したその地域には村人の姿はない。アカと呼ばれ、虐殺された無辜の民人達。その恐ろしさに村人は今なおここに住むことができていない。

濟州島は、韓国のカッブルがハネムーンで訪れる人気の地であり、多神教由来の文化・歴史は私たちにじみやすく、土産にはトルハルバン(石の守護神像)を思わず手にした。この島の人々はやさしく観光の島にふさわしい。私たちのガイドさんは美人のヨンエ(なんとチャングムの俳優と同じだ)さん、よく我々の要望を聞いてくれた。この3月の手紙では「今年、4・3事件の60周年で、日本のあちこちから興味を持つている方が濟州島にきます。日本にも平和のために努力している人が沢山わかつたが、当然なことといえ、日本は世襲制の天皇が国の代表である。アジアの隣国を旅する度に、この国

の遺産に真摯に向き合う姿勢は立派なものだ。今回、選挙で大統領が代わつたが、当然なことといえ、日本は世襲制の天皇が国の代表である。アシアの隣国を旅する度に、この国

の後進性を恥に思う。この近くには平和博物館があつた。館長の李英根さんはその日に拾い集めた日本帝国軍の砲弾2個を我々に示して「戦争には、勝者も敗者もない。皆被害者だ」と語つた。

昨年正月にはソウルに旅した。六千年の歴史を持ち、日本に多大な影響を与えてくれた最も隣国とのこの半島にはなかなか足が向かなかつたが食べ物、街並み、ふれるものもやさしい。フレンドリーな人々でほつとする旅だつた。ハングルをなんとかものにしたいと思う。安重根の記念館を訪れ、その遺言に接して、それは東アジア共同体の思想に通ずる今日的意味を持つものとして心を打たれことを思い出している。



旧日本軍飛行機の格納庫

京都の民主運動史を語る会

総会のお知らせ

とき 6月13日（金）午後2時（

ところ 京都市職員会館かもがわ第1会議室

（河原町竹屋町東入る・電話256-1307）

小講演

「京都の自由主義者 佐々木惣一

——敗戦前後を中心には

講師 松尾尊児・京都大学名誉教授

小講演のあと総会をおこないます。会員外のみなさんもふくめ多数のご来会をお待ちしています。

（会員外の参加者は資料代三百円が必要です）



スクランプ情報



革新京都の先駆者たちの出版祝う

岡本康さんの著書『革新京都の先駆者たち—治安維持法犠牲者の群像』

（つむぎ出版）の出版を祝う会が4月

16日夜、コープイン京都で開かれ、東京、大阪をふくむ各界から百数十人が参加、「岡本さんならではの労作に感謝」「こんどは岡本さんの自己史を」など、傘寿を迎えます活躍する岡本さんの仕事をねぎらいました。よびかけ人を代表して岩井忠熊氏があいさつしました。

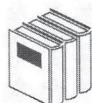
福留志なさん、106歳の誕生会

長崎で被爆死した「ふりそでの少女」の母、福留志なさんが4月17日、106歳になり、29日、綾部市の丹の国荘玄関前で「志なさんのご長寿を祝い平和を祈る」つどいが開かれました。志なさんは1921年から8年間、京都市の保育所で保母を勤め、結婚後九州へ。長崎にいた義兄に預けた長女が被爆死。綾部に帰った志なさんは全日自労の書記をしながら平和運動に献身、88歳のとき、娘を描いた絵が発見され、「ふりそでの少女」像が長崎原爆資料館に建てられました。

催し案内 ベトナム反戦ボスター展
7月21日まで、立命館大

学国際平和ミュージアム中野記念ホール。67年から70年代初めにアーティストたちが野外ボスター展をひらき抗議の意思を表明していたが、今回、長新太、いわさきちひろ、和田誠らの45枚を展示している。参観料400円。

編 集 後 記



大江 洸さんが4月17日に亡くなった。

78歳。大江さんは「燎原」07年7月号と9月号に「近況あれこれ」と題するエッセイを寄稿（前年の8月3日に執筆）されていて、「鶴見和子・金子兜太対談本に触発されて」というこの文の最後に自作の句

【陶枕に風の流れて耳冴ゆる】

を載せている。

そして「私の知らない知的な世界に生き、現世を論じている」金子、鶴見、多田富雄さん達を尊敬すると述べたあと「自分はその真似もできぬ。ぐうたらに生きていくのが精一杯というのが本音である。だからこの句も昼夜ごろ寝の日々、耳だけを働かせている姿を正直に写しどつたもの」と書いている。闘病生活の中、辞世を意識された句なのかもしれない。

大江さんは私の大先輩。府職労時代、ともに被告団として長い裁判を闘い、教えられたことは多かった。その大江さんから「燎原」の編集を手伝ってくれないか」と頼まれたのは06年12月。毎号苦労されていました。田北亮介先生から相談を受けてのことだった。大江さん、安らかに。（湯浅俊彦）